



海外交流

大阪大学外国語学部 ポルトガル語専攻について

河野 彰*

Portuguese Language Program, School of Foreign Studies,
Osaka University

Key Words : Portuguese as a Foreign Language, Luso-Brazilian Studies

1. わが国のポルトガル語教育

ポルトガル語を専攻できる大学はいくつか存在しますが、最初にポルトガル語学科が設置されたのは東京外国語大学の前身である東京外国語学校で、1919年（大正8年）のことでした。設立の経緯については、同校出身者でない私には不明ですが、最初の移民がブラジルに到着したのが1908年（明治41年）のことで、それ以前にスペイン語学科がすでに存在していたことから、新たにポルトガル語学科を設立したのはブラジルを考慮してのことだったのではないかと想像されます。以来、ポルトガル語専攻は東京外国語大学の独壇場でしたが、1964年（昭和39年）に上智大学外国語学部ポルトガル語学科が設立され、国立で1校、私立で1校という体制ができましたが、東京に集中した状態でした。1967年（昭和42年）、京都外国語大学にポルトガル語専攻の学科が設立され、東京以外にもポルトガル語が学べる大学が誕生しました。わが国の大学レベルでのポルトガル語教育は、東京の国立大学1校（東京外国語大学）、私立大学2校（東京の上智大学と関西の京都外国語大学）の3校のみという状態がしばらく続きます。その間、他大学でもポルトガル語の授業そのものは開講されていたようですが、いわゆる「専攻語」ではありませんでした。

1908年に開始された日本人のブラジル移民は、

1978年（昭和53年）に70周年を迎えることになり、ブラジル移民70周年式典がブラジル、サンパウロで盛大に祝われました。この70年祭はこれまでの記念式典のうち最大のものでした。わが国からは当時、皇太子であられた今上陛下が、美智子妃殿下とともにブラジルをご訪問になり、現地の日系人社会から大歓迎を受けました。このような日本とブラジルの交流の機運がますます高まる中、大阪外国語大学にポルトガル語学科の設立を認められ、これで東西の国立大学のバランスがとれることとなりました。このとき公募に応じて、幸い、採用され、赴任してきたのが私でした。大阪外国語大学におけるポルトガル語教育は1979年（昭和54年）4月に開始され、以後、学科組織や名称にはさまざまな変更があり、また2007年（平成19年）10月には大阪大学との再編・統合により大阪大学外国語学部外国語学科ポルトガル語専攻となりましたが、「ポルトガル語を徹底的に学習し、その語学力を基礎として、広いポルトガル語圏に関する研究・教育を行う」という基本姿勢は一貫しています。

現在の教員は以下のとおりです。河野彰（ポルトガル語学）、東明彦（ブラジル史）、平田恵津子（ブラジル文学）、坂東照啓（ポルトガル語学、ブラジル日系社会研究）の日本人4名が大阪大学言語文化研究科言語社会専攻に所属し、外国語学部の授業を担当しています。さらに特任教員（外国人）としてブラジルから Rogério Akiti Dezem（ブラジル史）を迎えております。やはり専任教員だけでは不十分ですので、数名の非常勤講師の助けも借りて、なんとかポルトガル語専攻として、ブラジルだけでなく、ポルトガルも視野に入れた、バランスのとれたカリキュラムを維持するよう努めております。

私はアメリカの大学におけるポルトガル語教育に関心があり、現地で教育と研究の実態を見た経験が



*Akira KONO

1948年9月生

上智大学大学院外国語学研究科修士課程
（1976年）

現在、大阪大学 言語文化研究科言語社会専攻 教授 文学修士 ポルトガル語学

TEL : 072-730-5471

FAX : 072-730-5471

E-mail : kono@lang.osaka-u.ac.jp

ありますが、一般にアメリカでは、ポルトガル語だけの独立した専攻（学科）はなく、Department of Spanish and Portuguese としてスペイン語専攻に併設されています。ヨーロッパの実情も似通ったものです。したがってポルトガル語だけが独立しているのはわが国をはじめ、韓国や中国の外国語大学であり、その意味でユニークです。ただアメリカの大学のカリキュラムを見てみると、ポルトガル語圏アフリカ諸国の文学や文化に関する授業や研究が積極的になされており、今後、わが国のポルトガル語界の課題となるものと思われます。

ポルトガル語を専攻した学生で、企業に進んだ人は比較的ブラジルに駐在する機会が多いようです。ブラジルをはじめ、ポルトガルやポルトガル語圏アフリカで、多くの卒業生が様々な分野で活躍しています。4大学の卒業生の数を合計するとかなりの数になり、ポルトガル語は決してマイナーな言語ではありません。

ポルトガル語圏文化の紹介も、近年ますます盛んになってきました。サッカー、音楽、映画、美術、そして文学作品の翻訳が増えたことも喜ばしいことです。専門の研究者以外にも大学でかつてポルトガル語を学んだ人たちがこつこつとポルトガルあるいはブラジル文学の翻訳を進め、出版にこぎつけています。これもわが国のポルトガル語教育の裾野が広がったことの成果でしょう。

2. ポルトガル語について

しばしば「ポルトガル語はスペイン語の方言みたいなもの」といったことが言われます。ロマンス諸語のひとつであるポルトガル語はスペイン語やフランス語、イタリア語とともに共通の祖先であるラテン語にさかのぼりますので、たしかにこれらの言語には類似点が多く見られます。したがって、これらのいずれかひとつ、ふたつを学んだ経験のある人にとっては、ポルトガル語は学びやすいと言えるでしょう。特にスペイン語とはかなり似ていると言えます。語彙や文法がかなり似ているので、初学者は同時に学びはじめない方がいいようです。例をあげますとスペイン語では *aquí*（ここ）のようにアクセント記号が必要ですが、ポルトガル語では *aqui* のようにアクセント記号は不要です。またポルトガル語では1人称複数の動詞活用形は、直説法現在と過

去が同形ですが（例：*comemos* 私たちは食べます・食べました）、スペイン語では現在が *comemos*、過去が *comimos* となります。したがってこれら2言語を同時に学ぶと混乱する危険性があります。

一方、発音に関しては、ポルトガル語はスペイン語と大いに異なります。その特徴として、母音体系がスペイン語より複雑であり、鼻母音があること。また子音についても相違点がかなりあります。一般に英語はイギリス英語とアメリカ英語に大別され、両者の発音の相違は、多少英語を学んだ人には、かなり簡単に聞き分けられますが、ポルトガル語も同様で、ポルトガルの発音とブラジルの発音は大いに異なります。素人の耳にも両者の違いは明らかで、ブラジルの発音はイタリア語やスペイン語に近く感じられますが、現代ポルトガルの発音はまるでロシア語や東欧諸国の言語のように聞こえます。これはブラジルがどちらかといえば16世紀ごろの古い発音を残しているのに対し、ポルトガルでは、とりわけ18世紀に発音が大きく変化し、アクセントのない音節の母音をきわめて弱く発音する傾向が強まったからです。たとえば *menino*（男の子）はブラジルの発音では *me-ni-no*（メニーノあるいはミニーノ）のようになるわけですが、ポルトガルの発音ではアクセントのある真中の *ni* の母音だけ明瞭に聞こえ、あとの音節の母音は弱化して、ほとんど聞こえません。まるで *m'nin'* のように聞こえます。一般にブラジルではポルトガルの発音は聞く機会が少なく、また旧宗主国であっても、こと発音に関してはポルトガルのそれはブラジルでは規範とみなされていません。はじめてポルトガルの発音を聞くブラジル人にとっては聞き取りがむずかしいようです。この問題は、ポルトガル語を学ぶ日本の学生をも悩ませる問題です。しかし日本で基礎を十分に学んでいれば、留学などをした場合も、比較的簡単にポルトガルの発音に馴染んでいるようです。

ポルトガル語のセールスポイントとして、「ポルトガル語を学べば2億人と話せます」というのがありますが、これはポルトガル語圏の内、とりわけブラジルの人口が多いことに由来します。ヨーロッパの西端に位置するポルトガルはたしかに地理的には小国かもしれませんが、歴史上果たしたその役割は重要であり、ユニークな国といえるでしょう。最近、亡くなったイタリアの作家アントニオ・タブッキを

通して、ポルトガルの20世紀最大の詩人フェルナンド・ペソアがわが国でもようやく知られるようになりました。最後にこのポルトガル語圏最大の詩人

の詩の一節を引用して、ポルトガル語の字面に触れていただきたいと思います。(英訳を付します)

Ó mar salgado, quanto do teu sal / São lágrimas de Portugal!
Por te cruzarmos, quantas mães choraram, / Quantos filhos em vão rezaram!
Quantas noivas ficaram por casar / Para que fosses nosso, ó mar!
- Fernando Pessoa

[Osalty sea, so much of whose salt / Is Portugal's tears!
The mothers who wept for us to cross you! / All the sons who prayed in vain!
All the brides who never married / For you to be ours, O sea!
- English translation by Richard Zenith]

